

アメリカ演劇における黒人女優

—マヤ・アンジェロウ、ルビー・ディーからオードラ・マクドナルドへ—

岩本裕子*

要旨

アメリカ演劇における黒人女優の歴史は、アメリカ黒人史同様、白人主体のアメリカ演劇界で苦難の道であった。その業界で成功者となり得た先達たちの代表、マヤ・アンジェロウとルビー・ディーが、2014年5月末と6月半ばに死去した。2人の逝去に挟まれる時期、6月8日に開催されたトニー賞授賞式で、黒人女優の歴史でも記念すべき出来事が起こった。オードラ・マクドナルドが、演劇部門で主演女優賞を獲得したのである。オードラはすでに、ミュージカル部門での助演女優賞と主演女優賞を3回、演劇部門で助演女優賞を2回、実に5回の受賞を果たしていた。ビリー・ホリデイの役を演じた「レディ・デイ」によって、最優秀主演女優賞を獲得したのだった。アメリカ演劇界の人種を超えた女優の世界で、前人未踏の快挙である。マヤとルビーを見送ったアメリカ黒人演劇界は、オードラたち後進が引き継ぎ、先達たちの語り継ぎは、その演技に生き続けていくのである。

キーワード アメリカ黒人女優、トニー賞、ブロードウェイ演劇

目次

- 1 はじめに
- 2 マヤ・アンジェロウ：驚くべき人生と詩人としての旅路
 - 2.1 生涯と代表文学作品
 - 2.2 大統領就任式詩人・大統領自由勲章受章者
 - 2.3 自由と平和のための活動家
- 3 ルビー・ディー：社会正義のための活動家だった女優
 - 3.1 生涯と代表出演作品
 - 3.2 不滅の演劇『日なたの干しぶどう』“*A Raisin in the Sun*”
 - 3.3 公民権運動家ルビー・オジー夫妻
- 4 オードラ・マクドナルド：トニー賞「グランドスラム」女優
 - 4.1 半生と各賞受賞経歴
 - 4.2 トニー賞受賞6作品と黒人女優たち
 - 4.3 『レディ・デイ』(*Lady Day at Emerson's Bar & Grill*)
- 5 おわりに

1 はじめに

2014年6月8日日曜日の夜（米国東部時間）、ニューヨーク市マンハッタン区にあるラジオシティ・ミュージックホール（Radio City Music Hall）において、第68回トニー賞授賞式が開催され、CBSから日本を含む全世界に生中継放送された。ブロードウェイ・ミュージカル及び演劇の1年間の集大成となるこの式典で、1人の黒人女優によって、偉大な記録が作られた。

オードラ・マクドナルド（Audra McDonald：1971-）が、史上初のトニー賞6冠を達成して、ミュージカル部門と演劇部門の二つの領域で、それぞれ助演と主演の女優賞を獲得したのだった。今回受賞した演劇部門主演女優賞については、第4章で詳細に検討していく。オードラは今回の受賞スピーチで号泣しながら、次のように語った。

「この受賞は多くの先達たちの功績のお陰です。勇気ある（黒人）女性たちに敬意を表します。たとえば、レナ・ホーン（Lena Horn）、マヤ・アンジェロウ（Maya Angelou）、ダイアン・キャロル（Diane Carol）、ルビー・ディー（Ruby Dee）、ビリー・ホリデイ（Billie Holiday）です。この賞を特にビリーに捧げます」と。

ここに名前が挙がった黒人女優たちについて、本稿随所で言及、説明していくことになる。マヤ・アンジェロウについては、授賞式から10日程前に亡くなったことが、オードラに名前を言わせた要因であろう。ただルビー・ディーは、この時点では訃報が聞かれることはなく、この式典から数日後に亡くなったのだった。ブロードウェイ演劇には欠かせない黒人女優だったので、名前が挙がったのだろう。この発言をルビーが聞いたかどうか定かではないが、ルビーが耳にして天国へ行ったと信じたい。

2014年6月のトニー賞授賞式をはさむ形で、アメリカ演劇界に大きな功績を残した2人の黒人女優、マヤ・アンジェロウとルビー・ディーは天に召された。彼女たちの「語り継ぎ」を受けて、次世代を牽引する最前線に立つ黒人女優オードラ・マクドナルドが、史上初の6冠達成を果たした。この3つの事実をふまえて、本稿ではアメリカ演劇界における黒人女優の歴史をまとめていきたい。

日本でもロイター配信を経て、各紙に訃報が伝えられた。『朝日新聞』ではマヤに関する訃報は、5月29日朝刊で「米国の代表的黒人女性作家、マヤ・アンジェロウさん死去」と見出しされた。「公民権運動にも関わり、故キング牧師やマルコムXと親交があった」という説明も加えられていた。ルビーについては、6月13日朝刊で、「米女優ルビー・ディーさん死去 黒人差別題材の映画出演」と紹介された。2人に共通して「公民権運動家」「活動家」と形容されることを見逃せない。本稿では、作家や女優としての活躍にとどまらず、活動家としての功績を明らかにすることも目的とする。

2014年8月に筆者は、史料収集のためにニューヨーク出張し、オードラ・マクドナルドの演劇*Lady Day at Emerson's Bar & Grill*を見る機会に恵まれた。第4章では、オードラに演劇部門最優秀主演女優賞をもたらしたこの演劇を検討していく。2時間近くずっと歌い

続けているが、一人芝居形式のため、ミュージカルではなく演劇の領域とされている。第4章では、この演劇の主人公であるビリー・ホリデイ（Billie Holiday：1915-1959）についても検討する。トニー賞授賞式でのオードラの発言の意味が、本稿で明らかになるはずである。

14年前の2000年にも、今回同様に、ブロードウェイ・ミュージカルにおける黒人女優の偉業を目撃したことに刺激を受けて、「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」と題して『浦和論叢』に投稿した^[1]。この拙稿ではミュージカルにとどまらず、ブロードウェイ沿いに建つアメリカを代表する総合芸術施設の最高峰リンカン・センターにあるオペラの殿堂、メトロポリタン歌劇場（MET）における黒人女優の歴史をまとめることができた。

この拙稿が出発点となり、有色人種は舞台に立つことが許されなかった歴史を持つMETの舞台に、黒人として初めて立つことができたオペラ歌手マリアン・アンダーソン（Marian Anderson：1897-1993）について、2010年と2014年に出版した2冊の拙著で、マリアンの偉業に言及することもできた^[2]。

本稿では、亡き女優たちへの追悼や、その歴史をまとめるにとどまらず、過去の先達たちからの「語り継ぎ」を引き受けて未来に向かって活躍する、黒人女優たちへ託されたバトンの重みも再確認したい。

2 マヤ・アンジェロウ：驚くべき人生と詩人としての旅路

2.1 生涯と代表文学作品

女であることは「懸命に働くこと、自分のことを自分でかまうこと、何の恩恵も被らないこと」であり、自分の人生の手綱は自分で握ることだ、と語るのはマヤ・アンジェロウだった。マヤは少女の頃にレイプされて以来、何度も男たちからレイプの対象として見られながら、16歳のとき妊娠し、17歳で母になった。

自分の母とは離れて、祖母に育てられたマヤは、祖母からは「1人で生きること」を教えられた。母からは自由を教わり「私という誰にも束縛されない女性」になったという。自らも母親になったとき、祖母と母という2人の女性から、温かくも強じんな母性を受け継いだのだろう。

アメリカ社会で、人種と性の二重の抑圧を受けた黒人女性は、何世紀にもわたって互いに肩を寄せあい、互いを頼らざるを得なかった。母たち、祖母たちがしてきたように「愛することで、子どもたちをしつけ、教育し、社会を作っていくことを当然のようにするものだ」とマヤは語った^[3]。

マヤ生前の2011年に『マヤ・アンジェロウへの必携書：彼女の人生と仕事に関する参考文献』（*Critical Companion to Maya Angelou: A Literary Reference to Her Life and Work*：以下『必携書』と略記）と題された手引き書が出版された。ニューヨーク公立図書館ハーレム分館シヨンバーグセンターでは、閲覧室で開架されていたので、貸出手続きの必要なく利

用することができた。『必携書』の伝記部分最初には「アメリカ黒人女性詩人、作家、劇作家、映画とテレビドラマ制作者で監督、演劇と映画女優」と紹介し、「若い頃にはナイトクラブ歌手や[カリプソ]ダンサーも経験した。彼女の多才ぶりのお陰で、しばしばマヤは『ルネサンス・ウーマン』と呼ばれてきた」とした。「合衆国で最も代表的な女性自伝作家」と評した研究者もいた。

1928年4月4日、マルクエリット・アン・ジョンソン (Marquerite Ann Johnson) は、セントルイス (St. Louis, Missouri) で生まれた。父は栄養士、母は看護師で、兄が1人いた。兄ベイリーが妹のことを、“my sister”の代わりに“My”と呼んでいたことが後に“Maya”という芸名になった。苗字の“Angelou”は、1952年に離婚した最初の夫でギリシャ系アメリカ人の海兵隊員の苗字を残したのだった。

兄妹は幼少の頃、アーカンソー州スタンプス (Stamps, Arkansas) に住む母方の祖母に預けられた。祖母のことを“Momma”と呼び、前述したように「1人で生きること」を教えられた。スタンプスでは10年間過ごし、16歳までの生涯が書かれた自伝第1作 *I Know Why the Caged Bird Sings* (矢島翠訳『歌え、翔べない鳥たちよーマヤ・アンジェロウ自伝』立風書房、1998年) には、スタンプスでの経験が書かれた。

1944年高校の卒業式直後、16歳で男の子を出産した。マヤの生涯で唯一の子どもでクライド (Clyde) と名付けたが、後に息子自身の希望で彼のことを「ガイ」(“Guy”) と呼ぶことになった。母親に似て文才に恵まれた息子は、仲のよい親子としてマヤの人生を支えた。『必携書』には、マヤの私的な写真が多く掲載されているが、息子ガイの家族と兄ベイリーの家族と一緒に写ったマヤの満面の笑みを見ると、マヤの生涯を支えた2人の肉親男性たちの存在の大きさを実感することができる^[4]。

ガイ出産後のマヤの人生は、息子を育てるために様々な仕事を重ね、それらの仕事全てがマヤ自身の可能性を広げて、「ルネサンス・ウーマン」の人生を歩み続けた。1950年代半ばから60年代は、アメリカ黒人にとっては公民権獲得運動が、また黒人の出自であるアフリカ大陸では独立運動が展開された時代でもあった。マヤは自らの政治的な立場も明確に示した。

南アフリカ共和国のアパルトヘイト反対運動にも加わったり、エジプトのカイロを訪れアラビア語を学んだり、ガーナで働いた時期もあった。アラビア語ばかりか、西アフリカのファンティ語、フランス語、スペイン語、セルボ・クロアチア語、イタリア語を習い流暢に話すことができた。「ルネサンス・ウーマン」と呼ばれる由縁でもあるだろう。ガーナ滞在中の1963年8月には、キング牧師のワシントン大行進を支持するガーナ使節団を組織したことも有名である。翌年1964年にガーナを訪れたマルコムX (Malcolm X) の旅程を企画したのもマヤだった。

この時の縁で、マルコムXの組織で働くことを楽しみに帰国したマヤだったが、マヤの帰国数日後の、1965年2月21日にマルコムXはハーレムで暗殺されてしまった。この年の夏、ロサンゼルスでワッツで大規模な暴動が起こったときにも、マヤはそれを目撃しながら、当然のことと理解したのだった。同年創設のブラック・パンサー党 (The Black Panther

Party) に対しても、遙かニューヨークからカリフォルニアで活動する彼らを支援したのだった。

その後、ランダムハウスの編集者との出会いが、マヤに自伝を書かせることになり、1970年には自伝第1作 *I Know Why the Caged Bird Sings* が出版された。本稿巻末に列挙した6冊の自伝刊行の先駆けとなった。「合衆国で最も代表的な女性自伝作家」の誕生でもあった。

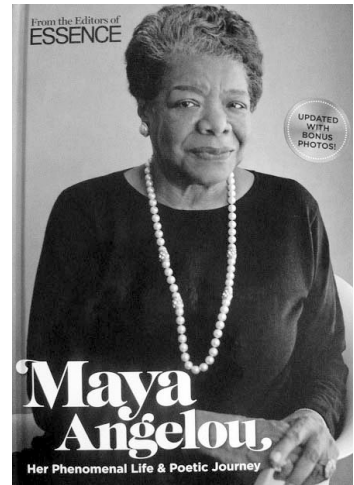
1973年にイギリス人の建築家ポール・デュフー (Paul Du Feu) と再婚して、ロサンゼルスで暮らした。作家でもあったポールは、マヤに「作家として真実を書くこと、読者が期待することを書こうとしないこと」という助言をした。互いに高め合うことのできた結婚生活だったが、1981年には別居を決めて、マヤはノース・カロライナ州へ引っ越し、ポールはカリフォルニアに残った。マヤの終の棲家は、ウinston・セイラム (Winston-Salem, North Carolina) となった。

2014年5月28日朝8時頃、マヤ・アンジェロウはウinston・セイラムの自宅で、親族に看取られ亡くなった。その2日後には、シオンバーグセンターでは、マヤに関する展示会を開催した。その展示のタイトルは“Phenomenal Woman: Maya Angelou 1928 – 2014” (May 30, 2014 – June 30, 2014) であった。このタイトル“Phenomenal Woman”は、1995年にマヤの朗読でグラミー賞を受賞したアルバムタイトルの一つでもあった。

マヤ逝去直後に黒人女性雑誌エッセンス誌 (*Essence*) の編集者たちによって *Maya Angelou, Her Phenomenal Life & Poetic Journey* と題された追悼写真集が出版された。(写真右はその表紙) シオンバーグセンターの展示タイトル同様に、マヤのアルバム作品から引用したのだろう。本稿第2章の副題には、この写真集のタイトルをそのまま引用することにした。マンハッタンの書店新刊コーナーには平積みされていた^[5]。

シオンバーグセンターでの展示会は、筆者が訪問した8月後半にはすでに終了していたが、司書の配慮で開催中のチラシを入手できた。「母なる女王であり、人権の地球規模のチャンピオンであったマヤ・アンジェロウ博士は、詩人、ダンサー、作家、ジャーナリスト、女優、監督、教育者であったと同時に、古くからのシオンバーグセンターの支持者で主張者、さらに友人だった」^[6]と故人の説明がなされていた。

展示品の例として、マルコム X からの手紙 (1965.1.15)、ジェームズ・ボールドウィン (James Baldwin) からの手紙 (1970.11.20)、全6作出版されたマヤの自伝のうち最初の自伝 *I Know Why the Caged Bird Sings* の手書き原稿とタイプ原稿と初版本 (1967–68, 1977) など、さらに次節で詳細を検討することになる、クリントン大統領第1期就任式で詠んだ詩のオリジナル原稿があった。



Maya Angelou

2.2 大統領就任式詩人・大統領自由勲章受章者

1993年の第1期就任式で、黒人女性で舞踏家・女優として活躍する詩人マヤ・アンジェロウが、「朝の脈動」(‘On the Pulse of Morning’)と題する詩を詠み、朗読した。大統領就任式で詩が詠まれるのは、1961年のケネディ大統領の就任式以来だった。北アメリカ大陸の「岩と河と木」が世界各地から到着した様子を詩にしたもので、それらは皆、様々な人種や民族を象徴し、彼らを迎えた合衆国を讃えたのである。

この後、「朝の脈動」は小冊子となって市販され、マヤ自身の朗読で録音されたテープも販売された。詩を朗読する前には、この詩に関する説明がある。この詩は「岩と河と木」のそれぞれにまつわる黒人霊歌にヒントを得て作られたとのことで、黒人霊歌のさわりがマヤ自身によって歌われた。

まず「岩」に関する霊歌は「隠れ屋もない」と訳されるが、原題は黒人英語をそのままに、“Dere’s No Hidin’ Place Down Dere”である。「河」に関する霊歌では有名な「深い河」(“Deep River”)を歌っている。最後の「木」では「私は木のように根を生やしてじっと動かない」と最後に歌われる黒人霊歌を歌ったあとに、「私の祖母が大好きだった曲」との説明を加えていた。母ではなく祖母によって育てられた生い立ちのマヤだったが、母性にあふれた彼女の朗読を聞くだけで、そのあたたかさ、強さ、やさしさに包まれていくようである。「希望を持って、ただ言おう、おはようとだけ」と結ばれた「朝の脈動」は、聞く人の心に新たな旅立ちの勇気を与える。

ブッシュ(父)共和党政権を一期で倒して、民主党を支持する黒人票のお陰もあって大統領となったクリントンにすれば、黒人女性詩人、マヤ・アンジェロウへの依頼は当然の選択だっただろう。就任式の様子は、日本へも深夜同時中継されていたが、この詩の朗読が始まった時点で、日本では画面は残しながらも音声は切られて、日本の解説者によるクリントン新政権の予想がなされていた^[7]。

大統領就任式において、祝賀歌唱が行われた先例は、1957年のアイゼンハワー大統領、1961年のケネディ大統領の2例である。2人の就任式はともに、国歌♪「星条旗」の歌唱で、歌ったのは、マリアン・アンダーソンであった。この歌唱から30年が過ぎた1990年代に2回行われたクリントン大統領就任式のうち2回目についても、少し振り返ってみたい。

1996年に無事再選されたクリントン大統領は、翌1997年1月の第2期就任式でも黒人女性に晴れの舞台を用意し、世界的なオペラ歌手、ジェシー・ノーマン(Jessye Norman)を選んだ。彼女は国会議事堂を背にして高らかに♪「アメージング・グレース」と♪「アメリカ・ザ・ビューティフル」を歌った。ジェシー・ノーマンは、1989年にフランスからの招待で、パリの凱旋門前で開催された大革命200周年記念の儀式でも仏国歌♪「ラ・マルセイエーズ」を絶唱した。

この先例にあやかっただのか、オバマ大統領は彼自身がファンだというアレサ・フランクリン(Aretha Franklin)の歌唱を望んだ。就任式でアレサが歌った曲は、♪America(My Country ’Tis of Thee)だった。この曲は、1939年にリンカンメモリアルで開催されたマリ

アン・アンダーソンのための復活祭コンサートで歌われた曲の1つだった。2009年の就任式の2日前、1月18日にリンカンメモリアルで開かれたオバマ大統領就任記念コンサートでも、この記録映像が映し出されていた。ちなみに、この映像紹介をしたのは、「おわりに」で言及する黒人女性歌手クイーン・ラティファ（Queen Ratifa）だった^[8]。

クリントン大統領第1期就任式で詠まれた「朝の脈動」の直筆原稿が、シヨンバーグセンターでのマヤ・アンジェロウ追悼展示会に陳列されたという。逝去2日後から開催された展示会は1ヶ月続いた。詩は最初にタイプで打たれ、手書きで修正された詩には、マヤの手書きで「朝の脈動」と加えられていた。タイトルが決まらない時点でのタイプ打ちという貴重な史料である。シヨンバーグセンターには、マヤ・アンジェロウ文書（Maya Angelou Papers）が収蔵されている。これは2010年に同センターに寄贈されたもので、『ニューヨーク・タイムズ』によれば、マヤは「私の文書や本は、それらを見たり読んだりしたいと思う人たちのために、大切に管理される状態にあったほうがよりよいと思う」^[9]と語ったという。

前節で追悼展示会配布チラシから引用した「古くからのシヨンバーグセンターの支持者で主張者、さらに友人」^[10]とあったように、マヤは、シヨンバーグセンターの発展に大きく貢献してきた。シヨンバーグセンターの紹介チラシには、彼女の写真と共に、同センター運営維持のための寄付を募っていた。黒人文化遺産保管のために、多くの人たちの協力を得られるように、マヤは呼びかけたのだろう。マヤに導かれて、多くの資金援助がなされ、貴重な黒人文化史料や遺産は、研究者や次世代の若者たちに読まれ続けていくことだろう。

2.3 自由と平和のための活動家

マヤは詩人や作家としての活動の他、女優や監督など映画人としても活躍した。1972年制作映画『ジョージア・ジョージア』（*Georgia, Georgia*）は、マヤが書いた脚本の映画化で、黒人女性の脚本による最初の映画として、ピュリッツァー賞候補にもなった。1976年の建国200周年という時代の空気に乗ってベストセラーとなった原作のTV映画化『ルーツ』（*Roots*：1977）では、クンタ・キンテの母親ビンタ（シシリー・タイソン）のお産を助ける産婆役で、エミー賞助演女優賞候補にもなった。

大統領就任式でマヤが詩を詠むのを見て、感動した黒人監督ジョン・シングルトンが、マヤに対して三顧の礼を尽くして話を進めるうち、1993年公開映画『ポエティック・ジャスティス』（*Poetic Justice*）の中で詠まれるジャスティスの心の叫び、魂の眩きとなる詩を作るばかりか、彼女自身の映画出演もかなったのだった。マヤが登場するのは次のような場面だった。

ロード・ムービーの一場面、主人公たち2組のカップル4人が旅の途中で「ジョンソン・ファミリー・リユニオン」と名付けられた大きな親族パーティに出会い、親族でもないのにバーベキューをごちそうになるのだった。この4人を遠目に眺める年輩の黒人女性3人の会話に、シングルトン監督の主張が感じられる。そのうちの1人がマヤだった。若者たちのモラルの低下、両親たちのしつけのいい加減さなど、厳しい批判が続く。

マヤがカメラに向かって観衆を諭すように語りかける意図は、こういう内容だった。「自分たちの環境が白人に比べ劣悪であっても、どういう人間になるかは本人の責任だ。環境に恵まれなくても、倫理的な生き方を自分で身につけようとする努力まで放棄するのは、自分たちの中にある甘えにすぎない」と^[11]。

1999年に「ダウン・イン・ザ・デルタ」(*DOWN IN THE DELTA*)と題される映画が、マヤの初監督作品となった。20世紀末、北部の都市で暮らす黒人女性が、心の癒しを求めて南部ミシシッピ州デルタへ帰ってくるという話を描いた映画である。シカゴに住むロレッタは、男女の2人の子どもを育てているが、アルコール依存症と闘っている。娘ロレッタの病気を知った母ローザは、娘母子3人に親戚であるアール叔父の住むデルタでしばらく住むことを勧めるのだった。北部の都会で心を病んだ女性が、南部デルタで救われていく話である。

アルコール依存症、アルツハイマー病といった現代社会が直面している問題を据えながら、主人公の女性の心の旅を追っていく、マヤ・アンジェロウ初監督映画は、「人間の真実を描いた作品」とされる。しかし『エボニー』の好意的な評に比べると、インターネット画面ではやや辛口の批評をされている。「詩的という程でもなく」と題されたこの批評では、詩人マヤによる監督なので、スクリーンにポエムを期待したこの批評家の期待が裏切られたことが述べられていた。残念ながら、日本公開されることはなかった^[12]。

21世紀に入ったマヤの活動は、自由と平和のための活動へと発展していった。すでに紹介した『必携書』の最後には、叙勲、役職、受賞などの一覧が掲載された。名誉学位を36校の大学から授与されていた。1973年のポートランド州立大学を皮切りに、2008年のシェナンドー大学までの36校の中には、黒人名門大学のハワード大学やスペルマン女子大学、女子大学ではスミス・カレッジ、マウント・ホリヨーク・カレッジ、アイビー・リーグではコロンビア大学などがあつた。

叙勲一覧には、77種類の受賞歴が並んでいる。各賞候補となったものとして、自伝第1作で全米図書賞、ピューリッツァー賞、トニー賞、テレビ映画『ルーツ』でエミー賞などがあつた。最優秀賞受賞として、グラミー賞朗読賞をアルバム“*Phenomenal Woman*”で受賞した^[13]。

特筆すべきは、2006年のマザー・テレサ賞や2008年のマリアン・アンダーソン賞だろう。2011年には、オバマ大統領から大統領自由勲章 (Presidential Medal of Freedom) を受けている。大統領自由勲章は、1960年から始まった合衆国での民間最高荣誉賞である。古くは1963年にマリアン・アンダーソンが受賞した。マヤ・アンジェロウの翌年にはトニ・モリソン (Toni Morrison)、その翌年2013年にはオブラ・ウィンフレイが受賞した。オバマ政権になって、次々と黒人女性受賞者があつていることは特筆に値する。

「驚くべき人生」を生きた「ルネサンス・ウーマン」は、自伝文学、詩、随筆、映像作品、音楽、と数え切れないほどの黒人文化を次世代に遺していった。その大半は「マヤ・アンジェロウ文書」としてシヨンバーグセンターで管理されている。偉大な「語り部」の語り継ぎを次世代が引き継ぎ、さらに語り継いでいくことになる。

3 ルビー・ディー：社会正義のための活動家だった女優

3.1 生涯と代表出演作品

アメリカ映画界における黒人俳優の歴史は、搾取と抑圧の歴史でもあった^[14]。演劇界では、主流から外され孤立した存在だった一握りの黒人俳優の中で、純粋な知性、威厳、さらに決断力を具現化した俳優がルビー・ディーだったと評価されている^[15]。

ルビー・アン・ウォーレス (Ruby Ann Wallace) は、1922年^[16] 10月27日にオハイオ州クリーブランドで生まれた。両親にとって4人の子どもの3番目に生まれ、ルビーが幼少期に一家はニューヨーク市に転居し、ハーレムに定住した。父親は、ペンシルヴァニア鉄道の荷物運搬人や給仕人の仕事をしながら、家族を養った。

学校教諭だった母は、子どもたちがゲットーに染まることを避けるため、文学や音楽を学ばせた。夕方には家族で、ロングフェロー、ワーズワース、また黒人詩人ポール・ローレンス・ダンバー (Paul Laurence Dunbar) の詩を音読したという。こうした知的な環境によって、ルビーは芸術に精通していたことが舞台での採用要因となったり、彼女の書いた詩が黒人週刊新聞『ニューヨーク・アムステルダムニュース』 (*The New York Amsterdam News*) に採用されたりした。

演劇に興味を示したルビーは、「アメリカ黒人劇場」 (American Negro Theatre: ANT) に入団した。そのメンバーには、シドニー・ポワチエ (Sidney Poitier)、ハリー・ベラフォンテ (Harry Belafonte) や、1940年代のブロードウェイで人種の壁を初めて越えた黒人女優ヒルダ・シムズ (Hilda Simms) たちがいた。ANTは1940年に、ニューヨーク公立図書館ハーレム分館、つまりシヨンバーグセンターの地下室から出発した。ロックフェラー財団助成金が絶たれて1949年に閉じるまで、18本の演劇を上演した。

ルビーは、この劇団のメンバーとして演劇を学んでいた1941年に、歌手のフランキー・ブラウン (Frankie Dee Brown) と結婚して、夫のミドルネームを芸名として、ルビー・ディーと名乗るようになった。だが、ルビーがハンター・カレッジを卒業する1945年には離婚したが、芸名は元夫の名前を残したまま女優としての人生を続けたのだった。

アメリカ演劇界で人種の壁を越えることは、決して容易でなかったことの象徴がANTの存在だろう。白人演劇界から隔離され、黒人自身による演劇集団で彼らの主張を演じたのだった。ANTの本拠地が、ハーレム135丁目のシヨンバーグセンターであったことは、ハーレムの知の発信地にふさわしいと言える。

ANTの実習生となることから始めたルビーは、演技の訓練をするだけでなく、床掃除をしたり、切符販売をしたりした。1946年に“Jeb”という劇で重要な役をもらった。戦地で重傷を負った黒人復員兵がアメリカ南部で新しい生活を始めようとする話だった。この主人公を演じたのが、後に夫となるオジー・デイビス (Ossie Davis: 1917-2005) だった。初めての出会いでルビーは、オジーに対して「知識人」という印象を持った。“Jeb”は9回の公演を経て閉幕したが、閉幕後も一緒に仕事を続け、1946年にはブロードウェイから全米

公演を計画したのは“Anna Lucasta”だった。ルビーは、この劇で賢明な売春婦の役を演じた^[17]。

1948年に、ルビーとオジーは結婚した。この結婚によって、2人の間には3人の子どもと、7人の孫が生まれたのだった。50周年記念の金婚式の1998年には、2人共著自伝『オジーとルビーと共に：この人生を一緒に』(*With Ossie & Ruby: In This Life Together*)^[18]を出版した。この夫妻がいかに社会正義のために立ち向かったかについては、後述する。

ハリウッド映画界でのルビーの活躍を見ておこう。1950年のデビュー作『ジャッキー・ロビンソン物語』(*The Jackie Robinson Story*)で、ルビーはロビンソン夫人レイチェルの役を演じた。2013年にもロビンソンの背番号をタイトルとした『42』としてハリウッド映画化されたように、ジャッキー・ロビンソンは、永遠の英雄選手であり続けている。

1947年ジャッキーは、黒人で最初の大リーガーとして、ブルックリン・ドジャース(現LA, Dodgers)からデビューした。このデビュー50周年にあたる1997年4月15日に、大リーグ全チームでは42番を永久欠番とした。現在ではデビュー日4月15日は、ロビンソン記念日として、選手全員が42番のユニフォームを着るようになっている。こうした現象については、ジャッキーの死後、ジャッキー・ロビンソン財団を創設し、後進の選手たちの育成に尽力したレイチェル未亡人の功績が大きいのだろう。

ブロードウェイ演劇を経た2年後の1961年に映画化された“*A Raisin in the Sun*”については、次節で詳細に検討する。その後も多くの作品に出演したルビーだったが、黒人若手監督の旗手として、1980年代後半に登場したスパイク・リー監督作品2作については、すでに拙著で論じたので、その一部を加筆修正して再録しておく。

1967年制作の『招かれざる客』(*Guess Who's Coming to Dinner*)の設定を逆にした立場を描いた作品が、スパイク・リー監督の『ジャングル・フィーバー』(*Jungle Fever*)だった。主人公は同じように黒人男性で、相手の女性は白人だが、WASPではなくイタリア系である。主人公フリッパーは、白人の建築事務所に勤める黒人のヤッピーで妻子持ち、同じ事務所に勤務する女性アンジーと不倫関係となる。2人の肉親たちが繰り広げる黒人社会とイタリア系白人社会の、各々の混乱を描いていた。

フリッパーの両親が、アンジーを夕食に招く場面など、『招かれざる客』の同様場面のパロディかと思わせるほどだった。フリッパーの父親で牧師役は、オジー・デビス、母親役はルビー・ディーが演じた。オジー・ルビー夫妻の、スクリーンでの存在感は圧倒的だった。父親が南部社会のあり方を語るのだが、怒りと恨みを持った目をアンジーに向けながら、奴隷制時代に黒人女性が白人男性から受けた性的暴力、白人女性の欲望の犠牲としてリンチに遭ってきた黒人男性の被害を話した。

父親の言葉をそばで聞くことに耐えられない母親、つまりルビー・ディーは台所へ移動して聞いていた。夫の言葉一つ一つをかみしめるように、神に祈るような仕草をしたり、手を打ちならしたりするのだが、そうした無言の演技にこそ、年を重ねた黒人女性の「主張」を読みとることができる。無言の主張はむしろ説得力を持つものだった。

リー監督作品に常連出演してきた夫妻に関して、リー監督はこう語った。「特別に彼らのためだけのシーンを書いた。二人が演じる役柄は、ずっと昔、まだ人々がノーマルだった時代の遺物なんだ」と^[19]。

21世紀に入って80歳を迎えて以降も、ルビーは現役女優として活躍を続けた。ハーレム・ルネサンスを代表する小説家で、文化人類学者でもあったゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston) が残した小説『彼らの眼は神を見ていた』(*Their Eyes Were Watching God*) が2005年に映画化され、主人公ジェイニーを勇気づける祖母ナニーの役を演じた。オプラ・ウィンfrey (Oprah Winfrey) のハーポ・プロダクションによる映画で、主人公はハリー・ベリー (Halle Berry) が演じた作品だった。

その2年後、85歳のときに『アメリカン・ギャングスター』(*American Gangster*) で演じたママ・ルーカス役でアカデミー賞助演女優賞候補となった。デンゼル・ワシントン (Denzel Washington) が演じた主人公は、1970年代に一世を風靡したニューヨークのハーレムに実在したドラッグ・ディーラー、フランク・ルーカスだった。ルビーはその母親役だった。出演場面は大変短かったが、その演技は圧倒的な存在感で、候補になったことは当然のように思えた。年齢で言えば、『タイタニック』(*Titanic*) で主人公の晩年を演じた、出演当時87歳だったグロリア・スチュアート (Gloria Stuart) に次ぐ年齢だった。同じママ・ルーカスの演技で、映画俳優組合賞 (The Screen Actors Guild Award) を受賞した。

ルビーにとって、アカデミー賞候補となったのは、この作品だけだったが、テレビドラマに与えられるエミー賞では、1991年にテレビ番組『デコレーション・デイ／30年目の勲章』(*Decoration Day*) で最優秀助演女優賞を受賞した。2003年には、ケーブルTVのHBO映画『解放された記憶』(*Unchained Memories*) の奴隷物語シリーズの語り手をつとめた。夫オジーと共に受賞した賞に関しては、後述する。

3.2 不滅の演劇『日なたの干しぶどう』“*A Raisin in the Sun*”

2014年4月3日こけら落としで、ブロードウェイ47丁目にあるエセル・バリモア劇場 (Ethel Barrymore Theatre) において2ヶ月間限定で、『日なたの干しぶどう』(“*A Raisin in the Sun*” 以下『日なた』と略記) が上演された。1959年初演と同じ劇場での再演であった^[20]。6月15日までの上演だったので、今年のトニー賞授賞式時点ではまだ終演していなかった。

第68回トニー賞最優秀リバイバル演劇に選ばれた『日なた』は、トニー賞5部門で候補となり、最優秀監督賞をケニー・レオン (Kenny Leon) が、最優秀助演女優賞をソフィ・オコネド (Sophie Okonedo) が受賞という、3部門での最優秀賞獲得となった。あと2つの候補は、主演女優賞にラタニア・リチャードソン (LaTanya Richardson)、助演女優賞にアニカ・ノニ・ローズ (Anika Noni Rose) が選ばれていた。前者は、オードラ・マクドナルドに、後者はソフィ・オコネドにトニーを譲った。いずれにせよ、黒人女優の間での競争となった今年の授賞式だった。

レオン監督は、主演男優のデンゼル・ワシントンを初めとする多くの演劇関係者に謝辞を述べていたが、中でも原作者への感謝は忘れていなかった。ソフィ・オコネドも「ユダヤ系ナイジェリア系イギリス人の自分が、アメリカの主婦を演じてこの賞をもらえたことに、アメリカ演劇の懐の深さを感じる。またロレイン・ハンズベリーの美しい台詞の数々のお陰で演じることができた」と、やはり原作者への敬意を述べた。さらに、ソフィが演じた役、主人公ウォルター・ヤンガーの妻ルースを、1959年の初演で演じたのは、ルビー・ディーであった。ソフィはルビーのことを「私のヒロインの1人」と敬愛の気持ちを表現していた。

黒人女性作家ロレイン・ハンズベリー (Lorraine Vivian Hansberry : 1930-1965) によって書かれた演劇『日なた』は、1959年にブロードウェイで上演され、その成功によってハンズベリーは、ニューヨーク劇評家協会賞の最年少受賞者となった。初めての黒人受賞者でもあった。現代黒人演劇史において、もっとも重要な出来事だったと言えるだろう。

ロレインの人生が反映された劇『日なた』のあらすじを確認しよう。舞台は、第二次世界大戦後のシカゴのサウスサイドである。サウスサイドとはシカゴの黒人居住区で、黒人女性初のファーストレディ、ミシェル・オバマの出身地でもあった。オバマ大統領誕生に至る選挙キャンペーン中には、「サウスサイド・ガール」を看板に自己紹介をしていた^[21]。

サウスサイドに住むある黒人一家、ヤンガー一家を描いている。主人公ウォルター・ヤンガーは35歳で、妻ルースと10歳の息子、母レナと医学生の妹ビニーサと5人で小さなアパートで暮らしていた。父の生命保険が入ったため、一家は黒人居住区から出て新しい家を購入し移ろうとするが、そこは白人居住区で地域住民から入居反対運動をされてしまった。

ウォルターが紆余曲折の結果、白人の申し入れを受け入れ、家売ることを選択した。白人の差別的な要求に屈して、自尊心を捨ててまでお金を手に入れようとする息子ウォルターに対して、母レナは、先祖代々受け継がれてきた黒人としての誇りを思い出させようと、ウォルターと白人の取引現場へ孫を連れて行くのだった。ウォルターは息子を見て我に返り、誇りを取り戻し、白人に向かってお金はいらぬ、自分たちは白人居住区に買った家に引っ越す、と堂々と宣言したのだった。

レナは、日光を浴びることもないアパートのベランダで、植物の鉢植えを大切に育てていた。植物同様に二人の子どもたちを大切に育ててきたレナは、植物自体は、自分の子どもたちであると同時に自分自身なのだと語った。この劇の重要なテーマは、ウォルターの自己探求だが、劇の最後にレナは「彼は今日ついに一人前の人間になったわね。雨の後の虹のように」と語り、息子の人間としての成長を認めるのだった。

『日なた』では黒人一家が厳しい現実を受け入れ、白人に立ち向かう勇気を持ちつつ、希望を抱きながらたくましく生きようとする肯定的な姿勢が描かれた。1959年のブロードウェイ上演2年後には、シドニー・ポワチエ (Sidney Poitier) との共演でハリウッド映画化もされた。ブロードウェイ演劇としては、古典的名作として何度も再演され、それが2014年春にも再演され、最優秀リバイバル賞に選ばれたのだった。

初演で、ルース役を演じたルビーは、さらに1965年に、アメリカン・シェークスピア祭

(The American Shakespeare Festival at Stratford, Conn.) で主要な役を演じた最初の黒人女優となった。『じゃじゃ馬ならし』(*The Taming of the Shrew*) のケイト役、『リア王』(*King Lear*) では末娘コーデイリアの役をこなした。

黒人演劇を代表する不滅の演劇『日なた』出演で注目を集めたルビーは、ハリウッド映画にも次々出演した。前節で検討したとおりである。

3.3 公民権運動家ルビー・オジー夫妻

「おしどり夫婦」とは、この夫妻のための言葉だとさえ思えたのが、ルビー・ディーとオジー・デビス夫妻だった。前述したスパイク・リー監督の言葉通りである。夫妻は、生涯を通して社会正義のために活動し続けた。それは人種差別に限定されることなく、社会的に排斥された人々の人権擁護のためにも活動した。

その代表的な例が「ローゼンバーグ事件 (Rosenberg Case)」^[22] だろう。ニューヨークの電気技術者ローゼンバーグとその妻エセルが、1953年に原爆スパイとして処刑された事件である。1950年6月に、原爆スパイ容疑でエセルの弟グリーングラスが逮捕された。第二次世界大戦中、原子爆弾を製造したロスアラモスの原子力研究所で、機械工として働いていたグリーングラスの自白によって、ローゼンバーグ夫妻が原爆の機密をソ連に提供したとして、翌7月に夫妻は逮捕された。夫妻はそれを否認し、最高裁判所まで上訴したが、結局証拠不十分のまま1953年6月19日に死刑執行されたのだった。

アメリカ合衆国でスパイ容疑で処刑された最初の例となった。グリーングラスの自白以外に物的証拠がなく、最後まで無罪を主張したローゼンバーグ夫妻の冤罪を晴らすために、国際的に大規模な夫妻救援運動が展開された。ローマ教皇ピウス12世、物理学者アインシュタインなど多くの著名人が助命を訴え、ルビー・オジー夫妻も同様に活動したのだった。

この活動に続いて、1950年代半ばから60年代にかけて、合衆国で展開された多くの運動に積極的に参加し、自らの立場を明らかにしていった。その例には以下が挙げられる。バーミンガム刑務所から釈放されたばかりのキング牧師のために資金集め行事の司会を担当したり、マルコムX葬儀での弔辞(頌徳文)をオジーが引き受けたり、ブラック・パンサー党への経済的援助、SNCC(学生非暴力調整委員会)、SLCC(南部キリスト教指導者会議)、NAACP(全国黒人地位向上協会)といった、黒人運動を牽引していた組織の活動を積極的に行った。またベトナム戦争反対表明は、ルビー・オジー夫妻の立場を明確にするものだろう。

2人の立場は高齢になっても揺るがなかった好例がある。1999年に起こったNYPD(ニューヨーク市警)による黒人射殺への抗議デモに参加して逮捕されたのだった。アフリカのギニアからの移民だった当時22歳だったアマドゥ・ディアロ(Amadou Diallo)が、1999年2月4日ニューヨーク市ブロンクス区にある彼のアパートの外で、無防備、無抵抗のままNYPDに射殺されたのだった。レイプ容疑者を捜索中の4人の私服警官が、ディアロに対して合計41発発砲し、そのうち19発がディアロを撃っていた。警官たちはブロンクス

の大陪審によって殺人罪で取り調べられ、25日に無罪判決が出されたのだった。

この事件とその判決への抗議で、ニューヨーク市警本部前で抗議デモが、3月24日に行われたのだが、そのデモ参加者のうち70人程が逮捕された。この日以降連日抗議デモは続き、合計800人が逮捕されたのだった。白人女優のスーザン・サランドンが逮捕された日には、219人が逮捕されたという。初日24日の逮捕リストには、ディンキンス元ニューヨーク市長、ムフメN A A C P会長など多くの著名人が含まれたが、ルビー・オジー夫妻も逮捕された。「今回の事件は、かつて全米で行われていたリンチを思い出させる」とルビーは発言して「『もういい加減にして！これで最後にして！』と、我々は声を大にして言うべきよ」とコメントした。この当時76歳だったルビーは、デモ隊がなぜ逮捕されたかについて「そうせざるを得なかった。選択の余地はなかったわ。私には息子が1人、孫息子が5人いる。身近な子孫に起こるかもしれないことを考えなければ！」と応えた。

この報道では、ルビー・オジー夫妻の近況も最後に加えていた。81歳になる夫オジーと共に、50年以上となる結婚生活を含めた芸能人生について語った伝記を出版したことが伝えられた^[23]。警官による暴力 (police brutality) という表現は、キング牧師の演説でも何度も用いられた。1960年代のアメリカ社会で大きく問題になったまま、1999年のこの事件以降も現在に至っていることが実証されるような事件が、2014年夏にも起こった。ミズーリ州ファーガソン (Ferguson, Missouri) の路上で、黒人青年が市警に6発撃たれた後、4時間近く放置されたという事件だった。もしルビーが生きていたとしたら、変わらない現実を嘆きつつ、率先して抗議活動をしたことだろう。

社会正義のために、声を上げ行動を起こし続けてきた夫妻は、多くの賞も受けてきた。その一部を紹介しよう。夫妻で一緒に受賞したものとして、1989年にはN A A C Pの殿堂入り、1995年に芸術大賞 (The National Medal of Arts)、2004年のケネディセンター名誉賞 (The Kennedy Center Honors) が挙げられる。すでに紹介した1998年出版の2人の共著自伝『オジーとルビーと共に：この人生を一緒に』の朗読アルバムは、2007年のグラミー賞最優秀話し言葉アルバム賞を受賞した。オジーが亡くなって2年後で、ルビーが1人で受賞したのだった。

ルビーの訃報が全米に知らされた6月11日木曜日に、ミシェル・オバマが、ツイッターでつぶやいたことは、「バラクとの初デートで見た『ドゥ・ザ・ライト・シング』でのルビーの演技を忘れることはないだろう」^[24] だった。ミシェルとバラク・オバマが最初のデートで見た映画は、このつぶやき通り『ドゥ・ザ・ライト・シング』だった^[25]。1989年公開のスパイク・リー監督作品である。全米に彼の名前が知られるようになったきっかけとなった作品であった。リー監督が育ったニューヨークのブルックリンを舞台に、カトリックであるイタリア系白人と黒人の対立、あるいは新参者である韓国系の人々に対する黒人たちの思い、白人警官と黒人たちとの関係などが描かれている。主流のW A S Pから外れる人々同士の軋轢が、最後には暴力に向かい、自らの怒りを暴力という手段に訴えてしまうのだった^[26]。

『ドゥ・ザ・ライト・シング』でオジーは、地元の黒人たちから「市長」(mayor) と呼ば

れ慕われる浮浪者の役で、ルビーは、窓辺や玄関の階段に座って、道行く人々を見守る「マザー・シスター」の役だった^[27]。「ずっと昔、まだ人々がノーマルだった時代の遺物なんだ」とリー監督が語ったように、ルビーの存在が、人々に自らを省みるような気持ちにさせたのかもしれない。政治的な立場は夫妻そろって左派として、社会の不正に立ち向かい続けたが、その心には、家族親族、縁者への深い愛情を持ち続けたのである。

4 オードラ・マクドナルド：トニー賞「グランドスラム」女優

4.1 半生と各賞受賞経歴

「グランドスラム」(grand slam)の表現は、トニー賞決定翌日発行*World Entertainment News Network*で「オードラ・マクドナルド、トニー賞の歴史を作る！ヘッドウイッグの勝利！」との見出しで伝えられた批評の中にあつた。グランドスラムとは、テニスやゴルフで1シーズン中の大競技での優勝独占を意味する。テニスでは、全米、全豪、全仏オープンとウィンブルドン大会で優勝すること、野球であれば、満塁ホームランのことらしい。つまり、その業界での全勝となる^[28]。オードラはトニー賞での「全勝」を果たしたのである。

トニー賞の結果が出た直後にネット配信されたニュースでは「クラシック界で訓練を受けた歌手で女優のマクドナルド(43歳)が、演劇とミュージカルの4部門全てで最優秀賞を受賞した」と紹介され、歴史的に見ると5回受賞者アンジェラ・ランズベリー(Angela Lansbury)を超え、故ジュリー・ハリス(Julie Harris)は6回受賞したが、そのうち1つは生涯の活躍に与えられる小像だったので、彼女の偉業も超えた、という説明がなされた^[29]。

2人とも白人女性で、アンジェラ・ランズベリーはイギリス生まれで、1951年に米国市民権を得た女優である。ミュージカルで主演女優賞4回、演劇で助演女優賞1回という内訳で、「全勝」には2つ足りない。日本では1984-96年放送のテレビ映画「ジェシカおぼさんの事件簿」(*Murder, She Wrote*)の主人公として知られる。ディズニー映画「美女と野獣」のポット夫人の声で若い世代の耳にも歌声は届いている。ジュリー・ハリスは、映画『エデンの東』(*East of Eden*)でジェームズ・ディーンの相手役女優として有名である^[30]。

本稿冒頭「はじめに」で、トニー賞でのオードラの受賞スピーチを一部紹介した。「この受賞は多くの先達たちの功績のお陰です。勇気ある(黒人)女性たちに敬意を表します。たとえば、レナ・ホーン、マヤ・アンジェロウ、ダイアン・キャロル、ルビー・ディー、ビリー・ホリデイです。この賞を特にビリーに捧げます」と。この発言はトニー賞授賞式の映像を見ながら、筆者がとったメモによった。前述のネット配信ニュースには以下の部分が引用されていた。

「私がこれまで肩の上に乗せていただいた、強くて勇敢で、勇気のある女性たちすべてに感謝いたします。中でもビリー・ホリデイに！ビリー、貴女は生前の貴女に与えられた評価よりずっと高い評価に値する女性です」と語った。さらにオードラは、母と亡き父に対して「あなた達の異常に過敏な性格の娘を病気扱いしないで、演劇の世界へ導いてくれた」ことに謝辞を残した。また式典終了後のインタビューで、祖母に謝辞を表した。ビリーの役を

こなすにあたって、「ビリー・ホリデイの話す声にとても近い話し方をした祖母を真似ることで、ビリーの役を自分のものとするのができた。ビリーの人生は哀しみにあふれていた。毎晩ステージに立つ前に、自分自身に語りかけた。『貴女はビリーの擁護者よ。ステージに立って彼女を守りなさい』と^[31]。

ビリー・ホリデイが乗り移ったかのような舞台での演技を目撃した筆者としては、オードラがステージに立つ前にこのように自分を鼓舞していたことを知り、納得できた。上演開始時点で、ピアニストによる司会で舞台に迎えられたビリー・ホリデイ役のオードラは、バーの客席に座る観客たちを含む舞台形式になっている裾から、ゆっくりヨタヨタ登場した。オードラがステージに立ち無言のままマイクに向かい、最初の歌「I WONDER WHERE OUR LOVE HAS GONE」を歌い出したとき、筆者は正直、大変驚いた。ソプラノ歌手オードラが歌う場面を何度か見たことがあった筆者だが、この時の彼女は従来とは全く違う声の出し方、歌い方、まさにビリー・ホリデイそのものだった。その声の出し方を祖母から学んだということだろう。

「異常に過敏な性格の娘」と自らを表現したオードラ・マクドナルドの半生を短く確認しておく。1970年7月3日アメリカ人の両親の元、ベルリンに生まれたオードラは、カリフォルニア州フレズノ（Fresno, Cal.）で育った。両親の理解によってジュリアード音楽院に進学して、声楽を学んだ。音楽教育では世界最高峰のジュリアードで教育を受け、1993年に音楽士号を授与された^[32]。

先頃、ABC放送の単刀直入インタビュー番組で、ジュリアードの学生時代に自殺癖があったことを告白した。演劇学校でトップに選ばれるかどうかのストレスに押しつぶされ、自分自身の気持ちを制御できなくなったオードラは、手首を切ろうとしたらしい。そのとき思いやりのあるジュリアードの教師たちのお陰で、自分を取り戻して学業を続け、卒業することができた。「誰かが自殺しようとしたとき、一番重要なことはその人をその人自身から守ること。精神の健康を守る人たちに委ねること。私もセラピストによって私の精神の健康管理をしてもらい、1ヶ月の入院を経て、私が必要とする治療を受けて戻ってくることができた」と、自分自身の経験を語った^[33]。

会場配布の小冊子にあるキャスト紹介のオードラのコーナーでは、最後にオードラが4人の名前を挙げて感謝を表している。“Will, Bridger, Sawyer and especially Zoe”の最後は彼女の娘ゾーである。2000年にコントラバス奏者のピーター・ドノヴァン（Peter Donovan）と結婚して、翌年ゾーを出産した。現在13歳になる。ゾーの名前は、ブロードウェイ業界での高齢の親友ゾー・コールドウェル（Zoe Caldwell）に因んでいる。

2009年にドノヴァンと離婚し、2012年にミュージカル俳優のウィル・スウェンソン（Will Swenson）と再婚した。再婚者同士ということで、ウィルの2人の息子、ブリッジャーとソーヤーとも親子関係となり、この5人は新たな家族を作り上げているとのことである。その私生活が、家族4人への感謝の言葉となったのだろう。謝辞の理由を「私の人生をこんなに幸せなものにしてくれた」^[34]とある。白人でモルモン教徒のウィルとの再婚によって、

オードラは自らの娘だけでなく、義理の息子2人も得て、新しい5人家族を作り、その家族によって力を得て「グランドスラム」ブロードウェイ女優となったということなのだろう。

トニー賞授賞式での謝辞でも、最初に母親と亡き父親、その次が上記4人への感謝だった。特に娘に対しては、“I am nothing without you.”と娘への愛情表現をしていた。母親になることによって、演技ができて、仕事ができている、ということなのだろう。

日本でオードラを見る機会と言えば、2007年からのテレビシリーズ『プライベート・プラクティス 迷えるオトナたち』で主人公の友人、生殖医療の専門家ナオミ・ベネット役でのレギュラー出演をあげることができる。歌手としてアルバム4枚をリリースしているし、『レディ・デイ』のサントラルアルバムも販売された。これらの業績によってトニー賞に限らず、2008年にエミー賞、2009年にグラミー賞の候補にもなった。

次節ではトニー賞に限定して、最優秀賞対象となった6作品を中心に検討していく。

4.2 トニー賞受賞6作品と黒人女優たち

天国の父親が娘を気づかって地上へ一日だけ降りてくる、という筋のモルナール (Ferenc Molnar) の戯曲「リリオム」(*Liliom*) を原作としたブロードウェイ・ミュージカルに『回転木馬』(*Carousel*) がある。1945年初演が最優秀ミュージカル賞を受賞し大ヒットしたために、1956年にハリウッド映画化もされた。1994年に再演され、最優秀リバイバル賞を受賞した。このときオードラは、主人公ジュリーの友人キャリーの役を演じて最優秀助演女優賞を獲得したのだった。

1998年度トニー賞授賞式的话题をさらったミュージカル『ラグタイム』(*Ragtime*) では、助演女優賞を含む4つのトニー賞を受賞した。オードラ・マクドナルドは「サラ」役で絶賛され、最優秀助演女優賞を獲得した。1994年の『回転木馬』に続いて2つめの助演女優賞受賞だった。受賞年1998年はガーシュイン生誕百周年で、カーネギー・ホールで開催された「記念式典」コンサートにおいて、『ポーギーとベス』(*Porgy and Bess*) のベス役で主要曲を見事に歌った^[35]。

『ラグタイム』のサラ役オードラの「控え」女優だったヘザー・ヘッドリー (Heather Headley) の演技が、ディズニー企画の新しいミュージカル『アイダ』の制作スタッフの目にとまり、ヘザー・ヘッドリーはアイダ役を獲得した。2000年の拙稿 (浦和短大紀要論文) ですでに『アイダ』の詳細な検討を行った^[36]。

歌唱能力豊かな黒人歌手たちも、差別の国、合衆国においては20世紀初頭時点でオペラの舞台に立つことなど論外のことであった。そうした事情を憂いたユダヤ系アメリカ人がいた。WASP主流社会の合衆国においてユダヤ人であるために厳しい境遇の中から作曲家、ピアニストとして有名になったジョージ・ガーシュイン (George Gershwin: 1898-1937) だった。ポピュラー曲「スワニー」や、管弦楽曲「ラプソディー・イン・ブルー」の作曲で知られるガーシュインは、ジャズの語法とヨーロッパの伝統を融合して、アメリカ独自の音楽を産み出した。

そうしたガーシュインが注目したのは、黒人たちがオペラの舞台に立つことができないという事実だった。黒人歌手だけによるオペラ（白人も数人出演するが皆悪役）を制作することで門戸を開こうとしたのだった。兄アイラ・ガーシュインの台本に従って、ジョージが作曲し1935年に初演した全三幕のフォーク・オペラは『ポーギーとベス』と題された。南部の黒人社会が舞台で独特の「ガラ」と呼ばれる黒人英語で歌われる。中でもものにジャズやブルース風にアレンジされることになる「サマータイム」(♪Summer time)が有名である。

1935年の初演は、ニューヨークのアルヴィン劇場 (The Alvin Theatre) だった。ガーシュイン自らの推薦でコーラスの指揮はエヴァ・ジェシー (Eva Jessye : 1895-1992)、ベス役はアン・ブラウン (Anne Wiggins Brown : 1915-) と黒人女性たちが重要な役割をこなした。しかし1935年時点の合衆国では、『ポーギーとベス』は特例と言えるほど、白人オペラに黒人歌手が登場するには時期尚早であった。

カミーラ・ウィリアムズ (Camilla Williams) は、1946年に主要なアメリカのオペラ会社と契約を結んだ最初の黒人女優だった。しかし、もっとも権威あるオペラ会社であるメトロポリタン・オペラ劇場は、カミーラとは契約しようとしなかった。カミーラ個人が否定されたのではなく、1946年時点でメトロポリタンは黒人歌手を認めなかったのである。メトロポリタン・オペラ劇場が黒人歌手をステージにあげるには1955年のマリアン・アンダーソンの登場を待たなければならなかった^[37]。

すでに見たようにオードラは、1994年*Carousel*と1998年の*Ragtime*でミュージカル部門助演女優賞を2つ獲得、さらにミュージカル部門主演女優賞は2012年の*Porgy and Bess*で受賞した。トニー賞はミュージカルだけでなく演劇も対象だが、演劇部門で1996年*Master Class*と2004年に、すでに検討した*A Raisin in the Sun*で助演女優賞を受賞していた。これまでで、助演女優賞4つとミュージカル部門主演女優賞で、合計5つのトニー賞を獲得していた。残すは演劇部門主演女優賞だけとなっていた。この状況で、2014年を迎えたのであった。

4.3 『レディ・デイ』

(*Lady Day at Emerson's Bar & Grill*)

この演劇は、1959年3月の真夜中、サウス・フィラデルフィアの場末にある小さなバー、エマソンズ・バー&グリルで開かれたショーの2時間を描いている。劇作家ラニー・ロバートソン (Lanie Robertson) は、この劇を書いた理由について「友達の1人が、亡くなる3ヶ月前最晩年のビリー・ホリデイのショーを観たことを話してくれた。場末のバーでピアノの上には酒が置いてあり、ビリーはふらつきながら舞台に立ち、酒を飲み続けながら歌った。途中愛犬のチワワ、ペピを抱えて歌い、つまづくこともあった。常連客7人と



LADY DAY brochure

いう聴衆のために10曲から12曲を歌ったという。この友人の話を聞いて、世界的に最も偉大なジャズ歌手だと思っていたビリー・ホリデイが、最晩年にはこんな状態で歌っていたことを聞いて、私はいつもそのイメージに恐怖を覚えた。この*Lady Day at Emerson's Bar & Grill*を書くことで、私の中からビリーの幽霊を追い払いたかったのだと思う^[38]と書いている。

1986年に書かれた脚本で、同年4月にはアトランタの劇場で初演され、6月にはオフ・ブロードウェイで上演された。28年ぶりに、オードラ・マクドナルドを主演にブロードウェイ上演となったのだった。9月21日終演予定^[39]で連日満員の盛況で上演が続いていた。7月29日付*World Entertainment News Network*での報道「魅了される事実」(“Fascinating Fact”)によれば、初期投資150万ドルを大きく取り戻す260万ドルの売り上げを記録したという^[40]。4月13日初演以来3ヶ月あまりでの快挙である。筆者が観た8月19日(火)夜も、ほぼ満席で会場は拍手喝采の渦に包まれていた^[41]。

『レディ・デイ』で特筆したい場面を数カ所紹介しておく。♪WHEN A WOMAN LOVES A MANを最初に歌った後、「またフィラデルフィアに来られて嬉しいわ」と挨拶してバンドメンバーを紹介しながら次々持ち歌を歌っていった。途中でテーブルにのせたグラスに酒をつぎ飲み始めた。酒を飲みながら、自分の人生を語るのだった。確執のあった母親に対する複雑な想い、先達のルイ・アームストロング(サッチモ)やベシー・スミスへの敬愛する気持ちなどが語られた。ベシーの持ち歌を歌った後、「ベシー・スミスはブルース歌手、私はブルース歌手じゃない、ジャズ歌手よ」と自らを位置づけもした。

劇も後半になると、随分酔ったレディ・デイは、南部の劇場で受けた人種差別経験について語り始めた。ヴァージニア、ジョージアなど南部あちこちの劇場で歌ってきたうち、バーミンガム(Birmingham, Alabama)でのエピソードだった。ステージで歌うことはできても、トイレ(bathroom)は白人用トイレを使えないばかりか、黒人女性用トイレがないと言う白人女性店員とのやりとり途中、トイレに行く前に彼女の前で用を足してしまったことを、大声で笑いながら説明した。そのあと、♪STRANGE FRUITを絶唱したのだった。絶唱の後、そのまま楽屋へ帰り、戻ることはなかった。

司会者が「レディ・デイは必ず戻るから、しばらく新曲を聴いて待っていてほしい」とピアノを弾き出した。いわゆる幕間(intermission)となったあと、レディ・デイは愛犬のチワワを抱いて舞台に戻ってきたのだった。泥酔した状態で数曲歌い、♪DEEP SONGを最後に舞台は真っ暗になり終演となった。拍手喝采が続いた後、明るくなった舞台での、オードラ・マクドナルドは、素の表情で会場の拍手に応えたのだった。ここで素の顔を見ることで、先程までの2時間近い見事な演技を改めて実感することができた。

サウス・フィラデルフィアのショーから4ヶ月後の1959年7月17日金曜日、ビリー・ホリデイはハーレムの病院で肝硬変と心臓麻痺によって死亡した。44歳だった。筆者は、拙著『スクリーンに見る黒人女性』(1999)で1章を設けて映画『ビリー・ホリデイ物語』(*Lady Sings the Blues*)を検討した。ダイアナ・ロス(Diana Ross)がビリーを演じ、この演技

によってダイアナは、アカデミー賞主演女優賞候補となった。この映画に描かれなかったビリーの最晩年を描いた演劇『レディ・デイ』は、もっともビリーに寄り添った仕上がりになっていたと思う。映画を検討したときの、筆者の「疑問」に正面から応えてくれた演劇だったと考える。その「疑問」を確認するために、以下に拙稿結語の部分を再録して、本節の締めとしたい^[42]。

ビリーが昏睡状態になった1959年5月31日に、救急車で運ばれ、父親同様病院をたらい回しにされるうちに、点滴で身動きがとれない状態になった。にもかかわらず、麻薬所持を看護師に密告されて、逮捕状を持った警官が死の床のそばに立っていた。快復し次第逮捕するためだったが、結局そのままビリーは帰らぬ人となった。一人の黒人女性、エリノラ・フェイガンとして人知れず亡くなっていったのだった。

この死に顔で映画の終幕を迎えることを、かたくなに拒否したのがダイアナ・ロスだった。カーネギー・ホールで超満員の聴衆を前に、逮捕後の復帰コンサートを成功させたという映画のフィナーレは、見る人に心の豊かさを残すのだろうか。私には、語り残されたビリーの人生の哀れさがいとおしくてならなかった。ビリーの人生には、他の歌手たちとは違う問題を抱えていたからこそ、彼女の歌は深みを増し、人々の魂を揺さぶり続けているのだろう。

伝記作家の一人、ジェームズ・バーネットによる解釈は、説得力を持っている。すべてを壊してしまう麻薬から、なぜビリーは抜けることができなかったのかの問いに対して、バーネットはこう語る。「その核心となっていたのは『不安感』だった。人種問題、家庭環境、社会背景、そして彼女が望むほどには彼女の芸術が大衆に受け入れられないことなど、様々に絡み合った不安を解かなければならなかった。彼女の不安の大部分は…男にまつわる不安だった。頼りになる友人や、彼女を深く気遣ってくれる友人が大勢いたにもかかわらず、自分を深く傷つけたり、悲しませたりする男ばかりと関係を持った。…孤独と悲しみの中に取り残され、物質的、経済的に搾取されるか、または精神的にダメージを受けた」と。

ビリーの深い苦しみや悲しみからくる不安感、彼女を人生のどん底に落としていったが、ビリー・ホリデイの歌という貴重な財産を後世に残した。ビリーの歌は、彼女の不安感ゆえに聞く人の心を揺さぶらざるにはおかないのだ。多くのファンを惹きつけてやまない理由はここにあると言えるだろう。

5 おわりに

2014年8月25日朝のクイーン・ラティファ・ショー (Queen Ratifa Show : every morning on CBS) のゲストは、2002年に映画『チョコレート』(Monster's Ball) で、黒人女優最初(唯一無二)のアカデミー賞最優秀主演女優賞受賞者^[43]となったハリー・ベリーだった。翌日(26日)公開予定の新作『フランキー&アリス』(Frankie and Alice)の宣伝のための登場であった。二重人格者の女性という難しい役をこなしているようだった。

司会のクイーン・ラティファは、元々ラッパーだったが、映画界にも進出して映画『シカゴ』(Chicago)で、ハリー受賞の翌年2002年度第75回アカデミー賞において、助演女優賞

候補となった経歴がある。同じミュージカルの映画化、『ヘアスプレー』（*Hairspray*）でも重要な役を演じていた^[44]。

このインタビューでハリーが語ったことは「19歳の時にはわからなかったことが、40歳を過ぎるとわかるようになってくる」「二人の子どもたちを育てることによって自らも育っている。母親であることで生かされている」ということだった。『フランキー&アリス』の日本公開も間近で、ハリーのさらなる演技の躍進に期待したい。

筆者はすでに1999年と2010年に出版した『スクリーンに見る黒人女性』『語り継ぐ黒人女性』において、アメリカ映画界、音楽界における黒人女性たちの活躍を論じてきた。2013年6月に上梓した『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）—絶望から希望へ』においても、その大きなテーマは「語り継ぎ」であった。この出版からちょうど1年となる2014年6月に、マヤ・アンジェロウとルビー・ディーの死去と、オードラ・マクドナルドの劇『レディ・デイ』という3人の黒人女性に関わる事実に出会い、このことを紡いだ本稿はこれまでの筆者の主張を確信するものとなった。

昨年執筆した論文でも、白人女性作家による黒人女性の歴史を音楽で綴るというミュージカルを対象として、至った結論はやはり「語り継ぎ」であった^[45]。アメリカ黒人女性史を研究することで学んだ「強くならざるをえない人生を生きた黒人女性たちが、後に続く仲間のロールモデルになっていく。そんな彼女たちの言葉は、人種も国籍も異なる日本で暮らす私たちにも何か力をくれる」^[46]と確信する。

謝辞

今回（2014年8月）のニューヨーク出張は、史料収集の目的は別のテーマだったが、本稿執筆を決めていたこととオードラ・マクドナルドの『レディ・デイ』を到着直後に観たことで、シヨンバーグセンターでの史料収集の時間のほとんどを本稿のために使った。すぐにこのように活字に残せたことは、シヨンバーグセンターの司書たち、中でもシャロン・ハワード、アンジェリン・ベルジョーの援助なしには叶わなかった。ここに深謝したい。また二夜連続で出待ちし、話す機会を得たオードラからは「日本人にアメリカ黒人女性の歴史を知らせて（educate）ほしい。頑張って！」と勇気づけられた。彼女のさらなる活躍に期待する。

I appreciate the heart-warming and intellectual support of the librarians in Schomburg Center in Harlem, NYPL, especially Sharon M. Howard and Angelin Beljoe. Without their assistance, I won't be able to write this paper.

I also want to say, "Thank you" to Audra McDonald, the first Tony Awards grand slam actress, for giving me the brave words, "Please educate Japanese people about African American women's history. Good Luck!" I hope her marvelous activities from now on.

註

- [1] 「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」『浦和論叢』第25号、2001年1月、pp.125-144.
- [2] 「マリアン・アンダーソンと♪My Country 'Tis of Thee」『語り継ぐ黒人女性』（以下『語り継ぐ』と略記）（メタ・ブレン、2010年）、pp.24-29；「マリアン・アンダーソンのためのコンサート」『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）—絶望から希望へ』（以下『物語』と略記）（明石書店、2013年）、pp.173-175.
- [3] 本節の導入部分は下記拙稿を一部修正の上再録した。コラム（Empowerment）「新たな旅立ちの勇気を与える：マヤ・アンジェロウ」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレン、1999年）p.58.
- [4] Jacqueline S. Thursby, *Critical Companion to Maya Angelou: A Literary Reference to Her Life and Work*, (NY: Facts on File, Inc., 2011) pp.3-17.
- [5] 今回の渡米で、筆者がデボラ・グレイ・ホワイト教授（Deborah Gray White）とのインタビューのために訪問したラトガース大学の書籍部では、すでに30%割引で店頭に並んでいた。
- [6] the handbill of Mourning Exhibit: "Phenomenal Woman: Maya Angelou 1928-2014" an exhibit at the Schomburg Center for Research in Black Culture, in Harlem, May 30-June 30, 2014
- [7] 本節の導入部分は下記拙稿を一部修正の上再録した。コラム（Empowerment）「新たな旅立ちの勇気を与える：マヤ・アンジェロウ」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレン、1999年）p.58.
- [8] 前著から11年過ぎた2010年10月に、11年分のアメリカ社会の変化をまとめた『語り継ぐ』を出版した。2009年1月にアメリカ史上最初の黒人大統領が誕生、同時に黒人女性ファーストレディ誕生ということが、本書執筆の大きな動機ではあった。第1部「黒人初の大統領誕生」の「就任式祝賀歌唱」（pp. 20-22）を一部加筆修正の上再録した。
- [9] Jacqueline S. Thursby, op.cit. p.16.
- [10] *'On the Pulse of Morning'* original typed poem and published book, The Inaugural Poem on the Occasion of the Presidential Inauguration of William Jefferson Clinton, 42nd President of the United States, January 20, 1993, Maya Angelou Papers, Manuscripts Archives and Rare Books Division: Mourning Exhibit: "Phenomenal Woman: Maya Angelou 1928-2014" an exhibit at the Schomburg Center for Research in Black Culture, in Harlem, May 30-June 30, 2014. この展示会は筆者が訪れた8月には終了していた。「3階の手書き文書／貴重本所蔵館で見られるよ」と言われたが、その時間がなく残念だった。来夏の訪問では、マヤ・アンジェロウ文書に一通り目を通すつもりである。
- [11] 「哀しみを詩に託す黒人少女たち」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレン、1999年）pp.175-177.
- [12] 「家族が原点—南部は約束の地か？」同書pp.241-242.
- [13] Jacqueline S. Thursby, op.cit. pp.412-413.
- [14] ハリウッド映画界における黒人映画人の状況について、以下の拙稿で検討した。「アメリカ黒人映画に関する一考察（上）—映画誕生100周年によせて」『浦和論叢』第15号、1995年12月、pp.57-83. 歴史研究者である筆者が映画を研究対象とする論文を書いた端緒となった。この拙稿以降、2010年『語り継ぐ』出版までの15年間、映像をめぐる単著、論文、雑文など書き続け、博士学位取得に至ることは、1995年時点では全く想像もしなかった。「余技」だと思って書き始めた拙稿で、多くのアメリカ黒人女性映画人に背中を押してもらい、筆者の人生をも動かされたと思っている。

- [15] *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, Editor Darlene Clark Hine, (NY : Facts on File, Inc., 1997), Theater Arts and Entertainment, p.88.
- [16] ルビー・ディーの生年に関して、多くの資料では1924年となっている。筆者の手元にある黒人女性百科事典のすべてが1924年である。ところが、『ワシントン・ポスト』に掲載された追悼記事執筆者サラ・ハルザック (Sarah Halzack) によれば「多くの伝記的記録では1924年となってきたが、ディー・デイヴィス会社公文書保管係のアーミンダ・トーマスは、それより2年早く1922年生まれだと確定した」とのことである。
- [17] 本節のルビーに関する事実は以下の2つの追悼記事によった。Obituary ; Biography, “Ruby Dee, Actress and Activist, Dies at 91” *The New York Times*, Late Edition (East Coast) [New York, NY] 13 June 2014 ; Obituary ; “Ruby Dee, Actress and Civil Rights Activist, Dies at 89” *The Washington Post*, 12 June 2014, written by Sarah Halzack
- [18] Ossie Davis and Ruby Dee, *With Ossie and Ruby : In This Life Together*, New York : Morrow, 1998.
- [19] 拙稿「スパイク・リー監督に見る黒人女性観：『招かれざる客』と『ジャングル・フィーバー』』『スクリーンに見る黒人女性』 pp.164-167. ; ロイター配信情報によれば、リー監督はルビーの訃報に接して「打ちひしがれた」とコメントしたという。
- [20] ABCテレビの人気朝番組“Good Morning, America”のアンカーを務める、人気黒人女性キャスター、ロビン・ロバーツ (Robin Roberts) が『日なた』上演に先立ち、主演のデンゼル・ワシントンにインタビューしていた。“Star Returns to Fill Big Shoes”ビデオ放映後の番組内で、興奮気味にロビン自身の母親が原作者のハンズベリーに会ったことがあること、今回の上演劇場が初演と同じ劇場であることを語っていた。(ネット配信情報) 2014年8月には、ロビンの最新書籍がマンハッタンの書店の新刊コーナーで平積みされていた。
- [21] 「[サウスサイド・ガール] のミシェル」拙著『語り継ぐ』 pp.62-77.
- [22] 「ローゼンバーグ事件」『ブリタニカ国際大百科事典』
- [23] “Veteran actors Ruby Dee, Ossie Davis arrested at protest” CNN News, 1999.3.24. ; この報道の最後で紹介されていた夫妻の伝記は註18のことである。
- [24] Obituary ; Biography, “Ruby Dee, Actress and Activist, Dies at 91” *The New York Times*, Late Edition (East Coast) [New York, NY] 13 June 2014
- [25] 拙著『語り継ぐ』 pp.72-75. ; 『物語』 pp.267-270.
- [26] 1989年全米公開のこの映画が遠因となって、1991年のロサンゼルス「暴動」が起こったのだと発言した俳優もいたほど、社会的に大きな影響を与えた映画だった。
- [27] コラム「ルビー・ディー：無言の意志を表わす渋い演技力」『スクリーンに見る黒人女性』 p.206.
- [28] 偶然ながら本稿執筆時点、テニス全米オープン開催中で錦織圭選手の決勝進出が決まった。“US Open”開催日に、ニューヨークを発った筆者は、ケネディ空港へ向かうシャトルバンからクイーンズ区にある開催会場をながめることができた。デボラ・グレイ・ホワイト教授とのインタビューで、彼女が自らもテニスを楽しみ、毎年夏を過ごすMartha’s Vineyardにある別荘から“US Open”の時期には帰宅すると聞いた。しかも、このインタビュー翌日から開催される初日の試合には、ラトガース大学から出る直通バスを使ってクイーンズへ行くのだ、と嬉しそうに語っていた。ホワイト教授の影響で、これまで関心を持たなかった全米オープンのニュースから目が離せなくなった。
- [29] “Audra McDonald dedicates Tony Award to Billie Holiday ; Audra McDonald makes history with a record sixth Tony Award for playing jazz singer Billie Holiday in Lady Day at

Emerson's Bar & Grill” *The Telegraph Online*, June 9, 2014

- [30] 両白人女優に関する最新情報は以下のネット情報による。(final access, Sep.7,2014)
http://en.wikipedia.org/wiki/Angela_Lansbury
http://en.wikipedia.org/wiki/Julie_Harris
- [31] “Audra McDonald dedicates Tony Award to Billie Holiday ; Audra McDonald makes history with a record sixth Tony Award for playing jazz singer Billie Holiday in *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*” *The Telegraph Online*, June 9, 2014
- [32] オードラに関する個人最新情報は、現在出版されている黒人女性百科事典には掲載されていない。彼女の活躍とこれらの出版が同時期のため、項目として掲載されなかったのだろう。不本意ながら、最新情報（再婚による新しい家族形成など）を得るためにネット情報に頼った。前述の白人女優同様に、URLを挙げておく。
http://en.wikipedia.org/wiki/Audra_McDonald (final access, Sep.7, 2014)
- [33] “Audra McDonald Opens up about Juilliard Suicide Attempt” *World Entertainment News Network*, July 25, 2014
- [34] WHO'S WHO IN THE CAST “AUDRA MCDONALD” in the brochure of *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*, p.17.
- [35] NHKドキュメンタリー「ガーシュイン生誕100年コンサート」(1998年放送)
 黒人グラフ雑誌『エボニー』女性特集号（3月はアメリカ合衆国では女性月間のため）がある。「21世紀を担う黒人女性たち」と題して35歳以下で各界で活躍する黒人女性21人の1人としてオードラ・マクドナルドが紹介された記事が以下である。‘For the 21st Century,’ *EBONY*, March 2000, pp. 68-69.
- [36] 本稿「はじめに」で言及したように、拙稿「ブロードウェイを飾る黒人女性：20世紀最後のミュージカルのヒロインたち」前掲『浦和論叢』第25号が、本論文に先駆ける拙稿であった。本稿では、黒人女性オペラ歌手についての言及でこの論文を引用したが、この論文執筆の直接動機は、以下であった。14年前の2000年8月上旬に筆者は、ニューヨーク・ワシントンD.C.・パリと三都市に出張する機会を得た。「9月11日」の前年で、今思えば「浮かれた」ブロードウェイ・ミュージカルを観たように思う。ミュージカル『キャッツ』は2000年夏が見納めだった。1989年以来11年間で7回訪米したが、6回目の観劇となる程の筆者は「猫狂い」を自称していた。1999年夏の閑古鳥が鳴いていたウィンター・ガーデン劇場の場内の様子が災いしたようで、1982年10月16日以来18年間に及ぶロングランが2000年9月10日に終了した。『キャッツ』に登場した27匹の猫のうち、ボンバルリーナ役の黒人女優マーリーン・ダニエル (Marlene Danielle) について書く機会と考えた。1982年の『キャッツ』こけら落とし以来、1回も休まず舞台上に立ち続けた女優であると同時に、唯一の黒人女優でもあった。彼女は、7000回以上の演技に対しMVP賞を受賞したのだった。
- [37] 同稿p.61.
- [38] Lanie Robertson, “WHY I WROTE THE PLAY” in the brochure of *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*, p.17.
- [39] オードラの公式HP (The Official Web site of Singer and Actress Audra McDonald) では終演10月5日になっていた。<http://audramcdonald.net/> (final access, Sep.7, 2014)
- [40] “Fascinating Fact” *World Entertainment News Network*, July 29, 2014
- [41] 毎夜、ファンの「出待ち」は絶えることはなく、かく言う筆者も到着翌日8月19日に観て出待ちし、その翌日夜も連続二夜オードラ・マクドナルドと直接話す機会を得た。「6冊の拙著のうち

4冊はアメリカ黒人女性に関する歴史や文化に関する本です。日本の大学でアメリカ黒人女性史を講義しています」と自己紹介した。前述のように、この事実に大変驚いた様子の彼女からは「日本人にアメリカ黒人女性の歴史を知らせて (educate) ほしい。頑張っ！」という言葉をもらえたことは、「出待ち」の大きな成果でもある。

- [42] 第二部第二章 差別への怒りを「奇妙な果実」に託して [ベリー・ホリデイ物語 (1972)] 『スクリーンに見る黒人女性』(メタ・ブレン、1999年) pp.83-84.; 拙稿執筆から15年経って、『レディ・デイ』を観た後に改めてシオンバーグセンター閲覧室で拙稿を読んで、涙を我慢できなかった部分でもある。本書は筆者が最初にシオンバーグセンターに寄贈した拙著である。その後『語り継ぐ』『物語 アメリカ黒人女性史 (1619-2013) —絶望から希望へ』を寄贈したので、ニューヨーク公立図書館蔵書で「IWAMOTO, HIROKO」で検索すると、この3冊が出てくる。シオンバーグセンター司書の配慮で、日本のメタ・ブレンのウェブ・サイトが紹介されていたことには感動した。
- [43] 拙稿「第七回アカデミー賞授賞式と黒人俳優」『スクリーンに投影されるアメリカ』(メタ・ブレン、2003年) pp. 97-110. 及び拙稿「トーク番組でのハリ・ベリーの語り」『語り継ぐ』(メタ・ブレン、2010年) pp. 163-168. を参照されたい。
- [44] 拙稿「ミュージカル映画『ヘアスプレー』」『語り継ぐ』(メタ・ブレン、2010年) pp. 129-134. を参照されたい。
- [45] 拙稿「ミュージカル『シスタス』にみるウーマンフッド」『津田塾大学紀要』No.46 (2014年3月) pp. 267-291.
- [46] 拙著『物語 アメリカ黒人女性史 (1619-2013) —絶望から希望へ』出版によって、以下の原稿を依頼された。本稿の結語はこの依頼原稿の最後で用いた表現である。Books : from Author『女性情報』2013年10月号、pp. 20-21.



Audra McDonald
(140820著者撮影)

【三女優出演主要作品一覧】

① マヤ・アンジェロウ (Maya Angelou : 1928.4.4. - 2014.5.28.) 本稿関連作品

- 1972 film *Georgia, Georgia*
- 1977 TV movie *Roots*
- 1979 TV movie *I Know Why the Caged Bird Sings*
- 1993 TV movie *There Are No Children Here* (with Oprah Winfrey)
- 1993 film *Poetic Justice*, directed by John Singleton
- 1995 film *How to Make an American Quilt*
- 1998 film *Down in the Delta*, directed by Angelou

6 Autobiographies (Maya's ages) + published year

1. *I Know Why the Caged Bird Sings* (1931-1944 : 3-16 years old) 1970
2. *Gather Together in My Name* (1944-1949 : 16-21 years old) 1974

3. *Singin' and Swingin' and Getting Merry Like Christmas* (1949-1957 : 21-29) 1976
4. *The Heart of a Woman* (1957-1963 : 29-35 years old) 1981
5. *All God's Children Need Traveling Shoes* (1963-1965 : 35-37 years old) 1986
6. *A Song Flung Up to Heaven* (1965-1968 : 37-40 years old) 2002

②ルビー・ディー (Rubby Dee : 1924-2014.6.11.) 主要出演作品

- 1950 *The Jackie Robinson Story* (デビュー作)
- 1961 *A Raisin in the Sun*
- 1989 *Do the Right Thing*
- 1991 *Jungle Fever*
- 2005 *Their Eyes Were Watching God*
- 2007 *American Gangster* アカデミー賞助演女優賞候補

③オードラ・マクドナルド (Audra McDonald : 1971-) トニー賞最優秀賞受賞6作品

- 助演女優賞：ミュージカル部門 1994 *Carousel* 「回転木馬」
- 1998 *Ragtime*
- 助演女優賞：演劇部門 1996 *Master Class*
- 2004 *A Raisin in the Sun* (on Broadway)
- 主演女優賞：ミュージカル部門 2012 *Porgy and Bess*
- 主演女優賞：演劇部門 2014 *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*

[SELECTED BIBLIOGRAPHY : according to each person]

①マヤ・アンジェロウ (Maya Angelou : 1928.4.4.-2014.5.28.) 関連

- ・ Obituary ; Biography, "Her Face Was a Brown Moon That Shone on Me" *The New York Times*, Late Edition (East Coast) [New York, NY] 29 May 2014
- ・ Obituary ; "Cultural icon Dr Maya Angelou passes at 86" *The New York Amsterdam News*, May 29-June 4, 2014, pp. 106, 22 ; Ethnic News Watch pg.2.
- ・ Mourning Exhibit ; "Phenomenal Woman : Maya Angelou 1928-2014" an exhibit at the Schomburg Center for Research in Black Culture, in Harlam, May 30-June 30, 2014
- ・ From the Editors of *ESSENCE*, *Maya Angelou, Her Phenomenal Life & Poetic Journey* (Essence Communications Inc., 2014)
- ・ Maya Angelou, *Mom & Me & Mom* (Random House, 2013)
- ・ Jacqueline S. Thursby, *Critical Companion to Maya Angelou : A Literary Reference to Her Life and Work* (NY : Facts on File, Inc., 2011)
- ・ Brian Lanker, *I Dream a World : Portraits of Black Women Who Changed America*,

- (New York : Stewart, Tabori & Chang, Inc., 1989), Forward “They Came to Stay” by Maya Angelou (pp.8-9), Maya Angelou (pp.162-163.)
- ・ *Notable Black American Women, 1st*, Editor Jessie Carney Smith, (Detroit : Gale Research Inc. 1992), pp.23-27.
 - ・ *Black Women in America, 2nd Edition*. Vol.1 of 3 Volume Set of Encyclopedias, Editor Darlene Clark Hine, (New York : Oxford University Press, 2005), pp.28-30. (written by Tasha M. Hawthorne)
 - ・ *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, Editor Darlene Clark Hine, (NY : Facts on File, Inc., 1997) Literature, pp.23-26. (written by Kathleen Thompson)
 - ・ 山田裕康「マヤ・アンジェロウ」加藤、北島、山本編著『世界の黒人文学』（鷹書房弓プレス、2000年）pp.212-215.

②ルビー・ディー (Ruby Dee : 1924–2014.6.11.) 関連

- ・ Obituary : Biography, “Ruby Dee, Actress and Activist, Dies at 91” *The New York Times*, Late Edition (East Coast) [New York, NY] 13 June 2014
- ・ Obituary : “Ruby Dee, Actress and Civil Rights Activist, Dies at 89” *The Washington Post*, 12 June 2014
- ・ *Notable Black American Women, 1st*, Editor Jessie Carney Smith, (Detroit : Gale Research Inc. 1992), pp. 260-262. (written by Jo Ann Lahmon)
- ・ *Black Women in America, 2nd Edition*. Vol.1 of 3 Volume Set of Encyclopedias, Editor Darlene Clark Hine, (New York : Oxford University Press, 2005), pp.341-345. (written by Hilary MacAustin)
- ・ *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, Editor Darlene Clark Hine, (NY : Facts on File, Inc., 1997), Theater Arts and Entertainment, pp.88-91. (written by Margaret D. Pagan)
- ・ Brian Lanker, *I Dream a World : Portraits of Black Women Who Changed America*, (New York : Stewart, Tabori & Chang, Inc., 1989), Ruby Dee (pp.110-111)
- ・ Ossie Davis and Ruby Dee, *With Ossie and Ruby : In This Life Together*, New York : Morrow, 1998.

③オードラ・マクドナルド (Audra McDonald : 1971-) 関連

- Reviews of *Lady Day at Emerson’s Bar & Grill* (2014)
- ・ “Audra McDonald Back to Broadway as Billie Holiday” *The New York Times*, Feb. 25, 2014
 - ・ “Audra McDonald to Sing the Blues as Billie Holiday” *World Entertainment News Network*, Feb. 25, 2014
 - ・ “Stepping into the Shoes of a Ravaged Singer” *The New York Times*, April 14, 2014

- ・ “A Song of the Country with Frog Chorus” *The New York Times*, May 18, 2014
- ・ “Audra McDonald Makes Tony Awards History, Hedwig Triumphs” *World Entertainment News Network*, June 9, 2014
- ・ “Audra McDonald dedicates Tony Award to Billie Holiday ; Audra McDonald makes history with a record sixth Tony Award for playing jazz singer Billie Holiday in Lady Day at Emerson’s Bar & Grill” *The Telegraph Online*, June 9, 2014
- ・ “New Music : Common Has a New Album and Audra McDonald as Lady Day” *The New York Times*, July. 22, 2014
- ・ “Audra McDonald sings Yahoo! Answers on ‘Tonight Show’ ” *UPI News Track*, July. 24, 2014
- ・ “Audra McDonald Opens up about Julliard Suicide Attempt” *World Entertainment News Network*, July 25, 2014
- ・ “The Philadelphia Inquirer Sideshow column” *Philadelphia Inquirer*, (Philadelphia, PA) July 26, 2014
- ・ “Fascinating Fact” *World Entertainment News Network*, July 29, 2014
- ・ “McDonald Has Her ‘Day’ ” *Final Cut*, p.139, 2014

④ ビリー・ホリデイ (Billie Holiday : 1915.4.7. - 1959.7.17.) 関連

- ・ Billie Holiday, and William Dufty, *Lady Sings the Blues* (1956). New York : Penguin, 1984.
- ・ John White, *Billie Holiday : Her Life & Times*, New York : Universe Books, 1987.
- ・ Angela Y. Davis, *Blues Legacies and Black Feminism : Gertrude “Ma” Rainey, Bessie Smith and Billie Holiday*, New York : Pantheon Books, 1998.
- ・ *Black Women in America, 2nd Edition*. Vol.2 of 3 Volume Set of Encyclopedias, Editor Darlene Clark Hine, (New York : Oxford University Press, 2005), pp.66-69. (written by Susan C. Cook)
- ・ *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, Editor Darlene Clark Hine, (NY : Facts on File, Inc., 1997), Music, pp.137-142. (written by Susan C. Cook)

⑤ ロレイン・ハンズベリー (Lorraine Vivian Hansberry : 1930 - 1965) 関連

- ・ *Black Women in America, 2nd Edition*. Vol.2 of 3 Volume Set of Encyclopedias, Editor Darlene Clark Hine, (New York : Oxford University Press, 2005), pp.11-16. (written by Margaret B. Wilkinson)
- ・ *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, Editor Darlene Clark Hine, (NY : Facts on File, Inc., 1997) Theater Arts and Entertainment, pp.115-122. (written by Margaret B. Wilkinson)

- ・ 阪口瑞穂「ロレイン・ハンズベリー」前掲、加藤、北島、山本編著『世界の黒人文学』pp.192-195.

Summary

African American Actresses in Broadway dramas
— Maya Angelou, Ruby Dee then Audra McDonald —

Hiroko Iwamoto

The history of African American actresses in Broadway dramas has been marked by countless hardships. Two of the pioneers in the theatrical world passed away on May 28 and June 11, 2014. The former was MAYA ANGELOU, the Presidential inaugural ceremony poet in 1993, and the latter was RUBY DEE, a main civil rights activist. Between their deaths, the 68th Tony Awards Ceremony was held on June 8 at Radio City Music Hall. A milestone in African American history was reached in that ceremony. Broadway star AUDRA MCDONALD made history at the Tony Awards on June 8 night, when she became the most decorated actress on the Broadway stage. Audra picked up her sixth Tony for portraying jazz and blues legend Billie Holiday in *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*. The Best Performance by an Actress in a Leading Role in a Play win also gave her the first Tony Awards grand slam. She had previously won gold as a best featured actress in an play (*A Raisin in the Sun & Master Class*), a best lead actress in a musical (*Porgy and Bess*) and a best featured actress in a musical (*Carousel & Ragtime*).

Keywords African American actress, Tony Awards, Broadway dramas

(2014年10月3日受領)